

佳作

小さな灯り

埼玉県草加市立栄中学校三年 成瀬 悠華

平成二十三年三月十一日、その日のことは私が十五年間生きてきた中で、最も心に残っている。しかしそれは、単に東日本大震災が起きたからではない。大惨事の陰で、思いも寄らず、人々の優しさや温もりに気付かされたからだ。

当時、私は仙台の小学校に通っていた。十四時半すぎ、突如学校中に緊急地震速報の不気味な音が鳴り響いた。慌てて机の下にもぐると、教室は静まりかえり、その直後大きな揺れが襲ってきた。まるで船にでも乗っているかのように、床は上下左右に揺れ、みんなじっとしているのもやっとなかった。私にとって、その場に座っていられないほどの揺れは初めてで恐ろしく、思わず泣いてしまった。すると、隣にいた女の子が私の肩にそっと手を置いた。「大丈夫だよ。大丈夫だよ。」

彼女は何度もそう繰り返した。私に語り掛けているようでもあり、彼女自身に言い聞かせているようでもあった。彼女の手は僅かに震えていたが、その小さな温もりと優しく響く声のおかげで、私は少しほっとできた。この大地震のなかで、自分が一人ではないことや、側に慰めてくれる人がいることを心からありがたく思った。

迎えに来た母と家に帰ると、マンションの一階には多くの住民が集まっていた。知らない者同士、互いの無事を確かめ合っていた。

「大丈夫だった？地震怖かったよね。」
隣にいた見知らぬ人が声を掛けてくれた。

「はい、とても怖かったです。」

悪夢のような一日に、私はぼう然としていて、そうとだけしか答えられなかった。しかしながら、フロアに広がる和やかな雰囲気のおかげで、冷たい非常食はどこか温かく感じられた。

それから毎日、不自由な生活が続いた。水も食料も簡単には手に入らない。携帯電話を充電するのに何時間も並び、夕方銭湯で入浴するには朝のうちに整理券をもらわなければならない。だがいつでも、みんなと励まし合うことで、これからも頑張ろうと

前向きな気持ちになることができた。

もしあの震災がなければ、どれほど多くの人の命が失われずに済んだことか。だが私にとっては、あの体験がなければ、自分が色んな人に支えられていることに気付かなかった。人同士が助け合い、互いを思いやる姿を見ていなければ、私達はいつでも一つになれることなど知らないままだった。

人の命、思い出、財産…災害は大切なものを、いつも簡単に奪い去っていく。しかし、失ったものが大きいだけに、そこから学ぶことも大きいのではないか。私の心の中には、優しさという小さな灯りが一つ灯った。これを、たとえ少しずつでも大きくしていきたい。いつか私も、他の人の心を温められるように。